

# 本多静六通信

第2号

発行  
本多静六博士  
を記念する会

## 秩父セメント創業者 諸井翁と本多博士

秩父セメント株式会社の創業者である諸井恒平翁と本多博士との関わりは、博士が「諸井恒平君は埼玉学生誘掖会創立(明治五年)当初以来約五十年間断えず世話になった益友である」と記すように、生涯を通じ極めて深い関係にあった。諸井翁は文久二年五月、現在の本庄市に生まれた。諸井家は代々武士であったが、幕末から明治初期にかけて度々火災に見舞われたのと、家業であった養蚕・糸繭事業の失敗により、家運は次第に傾くようになった。このため諸井翁は幼少期から苦学、独学を重ねることとなる。その後縁戚筋にあたる渋沢栄一翁の招きにより、我が国初の機械化による赤煉瓦製造(明治二十年日本煉瓦製造)の経営に参画したことを契機に、実業界へ入ることとなった。

諸井翁は、その後順調に事業を展開し、煉瓦会社のほか郵便、鉄道、電力、織物など数々の



秩父セメント秩父工場

玉島の振興策を話せ」といったことから、博士は次のような意見を述べた。「セメント産業については、既に欧米では従来の煉瓦建築がセメントの鉄筋コンクリートに代わり、煉瓦は単に装飾用に

事業に関与し、渋沢翁と共に明治・大正期の埼玉県の産業発展に大きく貢献した。こうした諸井翁の経歴、つまり苦学立行を重ね、事業を成功させた経緯は、まさに本多博士と共通するものであり、これらが二人を強く結び付ける結果となったといえよう。

さて、ここで秩父セメントの設立について若干の説明をしたい。会社設立の発端は、明治四十年に遡る。博士が第六回の洋行から帰朝するや、渋沢翁は親しい友人を招いて王子の自邸で晩餐会を開いた。このとき諸井翁も同席していた。渋沢翁が「今日は埼玉県の有力者が多いから、新たに欧米を視察された新知識で、まず埼

張りつける位に進んだのであるから、諸井君の煉瓦会社は所詮速かにセメント会社に発展すべきである」とし、その原料として秩父武甲山の石灰岩を紹介した。この話がセメント会社設立の一契機となり、渋沢翁並びに本多博士の指導・協力を得て、辛苦の末、紆余曲折を経て大正十二年一月ようやく諸井翁により設立された。後年(昭和二十五年)、本多博士は諸井翁との思い出について次のように記している。

「兎に角私の本務が大学教授であり、服務規律上他の営利会社に報酬を貰って関係することは固く禁じられていたので、民間の事業はその創立確定まで無報酬の顧問として参画し、完全に成立せる上は、直に関係を断つことになっていたが、秩父セメントだけは兄弟の如く親しかった諸井恒平君とその後を継がれた大友幸助君が、常に内外の問題につき相談に來られ、会社建物の増築、神社の設計、造園(中略)等々何れも恒平君や幸助君の依頼により、両君の勝れたる才能と其実行力に信頼しつつ、共に其計画に当たったのである」

このように本多博士は、専門の林学、造林学を通じ様々な企業と関係をもったが、秩父セメントとの関係は、また格別であった。

通信第二号の発行に当たり、記念する会では博士と最も関わりの深い企業として、秩父セメント株式会社を取材した。取材に当たり何かと御便宜をいただいた諸井三佐保様並びに同社広報室の皆様にご心から感謝申し上げます次第である。

# 努力と愛の人 本多静六

三浦道義

祖父本多静六の孫十四人の中で、唯一人の内孫本多健一君と並んで、最も可愛がられたのは私だと信じています。小さい時はいつも「西郷、西郷」と呼ばれました。それは私が円々とふとった赤ん坊で、西郷（隆盛）さんのようだったからです。

関東大震災後はずっと渋谷の家で、祖父の身近に住んでいましたので、何かといえは祖父のところへ行ってお話を聴き、いつも苦しみを乗り越える努力の人生を教えられました。

中学の頃幾何で落第し、井戸に身を投げ、思い直して勉強し、「本多は幾何の天才だ」と言われて、「天才とは努力のことだ」と悟ったこと、ミュンヘン大学での苦しい勉学との闘い、本多式貯蓄法等々有名になりましたが、私はここにあまり知られていない、祖父の一面をどうしてもお伝えしたいと思うのです。

昭和十三年春、植村の三男秀三君、大村の長男襄治君と私（三浦の次男）がそろって東京帝国大学法学部に入學し、祖父の処へ挨拶に伺いました。祖父は大変喜ばれ、「この度孫が三人揃って帝国大学法科大学に合格し、祖父としてこんな嬉しいことは無い。ついではお前達の励みの為に懸賞金を出すことに決めた。一番にな

つたら幾ら、二番なら幾ら」と。

祖父は学業成績優秀なことを大切に考え、娘の婿にすべて成績一位の者を選んだことでもわかりません。立身出世を人生の大事と考えられたに違いありません。鶴見祐輔の「英雄待望論」や「ブルターク英雄伝」を読んでは、私に回して呉れました。

大村襄治君は順調に内務省に進み、植村秀三君と私は一年遅れて、それぞれ判事へ、大蔵省へと進んだのですが、父が選んだ嫁が決まった頃、私は既に別の女性と一緒に住んでいましたので、父の怒りは激しく、勘当同然になりました。終戦の前後、都会のサラリーマンの生活は苦しく、特に安月給の役人で田舎とつながりのない者は、本当にみじめでした。そういう時に、唯一人いろいろ心配して下さったのは祖父だけです。妻が画を描いていましたので、わざわざ出版社の社長の家へ連れて行って、仕事の世話を下さった。



▲三浦道義氏、本多静六博士を偲ぶ会（平成4年10月22日）にて

その頃ある新聞紙上で、「身の上相談」を引き受けておられたのですが、それは趣向として二人の解答者を並べていました。一人は前文部大臣氏、一人がわが本多静六博士です。質問、「私は今一人の男性から結婚を求められています。しかし私には苦い過去があるのです。それを打ち明けて許しを乞うべきでしょうか」

前文部大臣氏の答え、「二人の間に隠しごとがあつてはなりません。どうか打ち明けて許しを得てから結婚すべきです」

祖父の答え、「過去を打ち明ける必要は全くありません。何となれば、彼は現在のあなたを愛したのですから。もし、あなたがそのことに少しでも負い目を感じるのなら、どうかその分だけ余分に彼を愛するように努めて下さい」私はこの言葉で、はじめて祖父の本当の偉さを知りました。苦しみを自ら味わった人、そしてそれを乗り越えた努力の人、人間本多静六を心から愛し、尊敬しています。

【著者紹介】三浦道義氏は、本多静六博士の次女・伊佐子氏の次男にあたられます。第三銀行頭取を経て、現在同銀行の相談役を務められています。

**本多博士の教訓** —まず自分を確立せよ—  
自分が食うに困るようでは、他人のことまで心配することはできない。自分がまず成功し、幸福になることは、一面他人をも喜ばせ、他人の幸福を助ける最良の方法だといえる。

# 六年生の「小さな旅」

三箇小学校長 伊藤伸一

去る七月十六日(木)、六年生の社会科見学として、都立日比谷公園を訪ねました。

公園を見学して帰った子どもたちに感想を聞いてみますと、次のように話してくれました。

○想像していた日比谷公園よりも美しく、迷子になりそうな広い公園でした。

○私たちの学校の本多博士が設計した公園だと知って、胸を張って歩きたい気持ちでした。

○「首かけ銀杏」は三箇小の銀杏(周囲四メートル以上)と同じ位かと思っていました。本多博士の気持ちを知っているかのように、どうしようと枝を張っていました。

さて、この日比谷公園の見学は、昨年十月十七日(金)、NHKが放送した「小さな旅」という番組がきっかけでした。

この放送で特に印象に残ったのは、公園内の大銀杏の姿でした。その時、室町アナウンサーは次のように解



▲日比谷公園を見学する三箇小児童

説しておりました。

これは樹齢五百年の銀杏です。今の日比谷公園差点近くにあつたものを移しかえました。根づくはずがないと反対される中を、公園の設計者本多静六博士が自分の首をかけて運びました。だから首かけ銀杏と呼ばれているんです。

私はこの話を単なるエピソードとは思えませんでした。むしろ、博士の公園建設にかける命がけの意気込みと受けとつたのです。

そして、画面ではおじいさんと二人の孫娘が手をつないで、大銀杏の根元を取り囲んでおりました。何と美しく、そして平和な姿ではありませんか。と同時に、現在多くの人々に愛され親しまれているこの公園を象徴する姿ではないかとその時思つたのです。

私はこの番組を見終えた時、背すじを走る感動を覚えました。そして子どもたちにも直接この公園にふれさせ、本多博士の心を感じさせたいと考えたのです。

この社会科見学を終えた子どもたちの感想を何ども読み返しておりますと、いみじくもアナウンサーが解説した言葉を思い出しました。

いつ訪れてもさりげなく美しい日比谷公園です。近代化のシンボルとして設計され築かれた洋風公園、その一方で東京にオアシスをみつけようとする夢があつたのかもしれない。

公園が設計されて、はや九十余年、日比谷公園は本多博士の願い通り、疾うに東京のオアシスとなっているのです。

博士の手掛けた各地の公園(一)

## 金沢・卯辰山公園

東京日比谷公園の設計者である本多博士は、日本各地の公園の設計・改



▲松の緑が美しい公園

造にも携わつた。石川県金沢市にある卯辰山公園もその一つである。卯辰山公園は市の中心部にあり、標高は百四十一メートル。山頂からは市内を一望することができる。

同公園は江戸時代、城を見下ろす位置にあつたため、長く御留山として一般人の立入りは禁止されていた。そのため長い間荒れた状態が続き、明治後期になってから漸く植樹が行われるようになった。

大正十二年四月十六日、本多博士は金沢市の招きにより日本庭園協会の理事長として、金沢の地を訪れ、早速同公園を視察した。地元「北国新聞」は、これを第一面で扱い、十七日の朝刊では「卯辰山公園視察、本多博士一行が、その意見は今日講演する」と報じた。また翌十八日の朝刊では「卯辰山を天下の名公園に―欧米の森林公園を説いて気炎万丈の本多博士―」と題し、大きく取り扱つた。

金沢市の公園台帳には、「大正十二年十二月、日本庭園協会の本多静六博士の設計改良案により卯辰山公園を改修する」という記載があり、同年中に改修整備が行われたことがわかる。

博士は専門の林学、造林学を通じ公園の設計にも大きく貢献したのである。本通信では、博士の業績の一つとして、全国各地で今なお親しまれている公園を中心に紹介していく予定である。

## 本多静六先生を偲ぶ(二)

島田得一

僕は立ったまま、ペコリとお辞儀をし来意を告げると、「そこへ座り給え」と云ったが、その言葉に故郷訛があつて、矢つ張ナアと懐しかった。先生は折原翁の手紙に一瞥を呉ると、「就職ナ、僕も帝大生等の就職を頼まれるが、今、君の知つての通り中々容易ぢやない。学校の武藤のがへよく話して置くから、盛岡の方で考えて貰わう」

僕は内心驚いた。武藤とは武藤林学部長のことである。東京帝大林学部卒業の、僕達にすれば校長の次に偉い人を「武藤のがへ」と呼び捨てである。

「ハイ、ハイ」

「ところで君は小林の地主の長男のようだな」



▲島田得一氏が訪れた当時の大日本山林会事務所（東京都港区赤坂）＝第三次三會堂ビルディング内。昭和2年竣工、昭和39年解体。（写真は社団法人大日本山林会発行「山林」より）

「ハイ、ハイ」

「君、ナロー、今云つた通り就職は容易ではない、君が就職戦線に割込めば、それだけ林学という限られた就職口が狭くなる」

「ハイ、ハイ、然し家が貧しいもんですから」

「そりや、何処も同じだ。田畑はどの位？」

「田畑は約十町歩位、群馬県に山林が八十町許りあります」

「そりや大へんだ。その山林の経営で十分ではないかね。伐期四十年としても毎年二町歩ずつの皆伐更新が出来る。僕はネ、一つ君が学識を生かして郷土の指導者に成ることを勧めるネ、どうだ君」

「ハイ、ハイ」

後年此の言葉はずつと僕の耳に残つた。是を早く実践すればよかつたナと思うことがなくなつた。

「ハイ、ハイ」

時計は十一時に近かつた。僕の腰が上つていたのを見てとられたか、先生は、

「就職の話はその辺でいいダロ、約一時間、今日は午前中時間があるから僕の人生講話を聴いて帰り給へ。何かの参考に成れば幸いだ。君はどうんは好きか？」

「ハイ、大好きです」

「そうか、僕も好きだ。この近くに旨いうどん屋があつてナ、君は若いから二杯、僕は年だから一杯、頼んでおくから」と云つて部屋を出て直ぐに戻つて来られた。

「では、と、君は「幸福」の定義を知つてい

るかネ？」

「ハイ、境遇や地位や家庭等の満足の状態を云うのではないでしようか」

「五十点だナ、……それに進歩発展がなければならぬ。自己の境遇に満足し、身体強健而も進歩発展がなければならぬ。是が幸福の定義だ」

「ハイ、ハイ」

「是は昔の話したが、京都に大火があつた。五条の橋の下に乞食の親子が寝泊まりしていた。橋の上は避難する人達でござつたがえしていた。それを眺めていた乞食の子供が、『チャンや、俺達は幸福だナ』と云つたら、父親が『これも親のお陰だぞ』と答えた。成程乞食はその一時は幸福かも知れん、然し長い年月乞食のまま幸福である訳がない、乞食には進歩発展が無いのだ」

「君は幸福を知つてるかい」

「行つたことはありませんが、親類先はあります」

「そうか、僕の子供の頃の日記にこういうことが書いてある」

「ハイ、ハイ」

「幸手の叔父に連れられて、上野の精養軒にて天井一杯馳走になる。金三銭五厘也、その味の上無く旨しとナ、ところが僕が今喰つて見てそれ程旨いというものでも無い。つまり同じ喰べ物でも境遇に依つて味が異なるものなのだ」

「所で君は勉強は好きか？」

「ハイ、どうも成績不十分でありまして」

「それはいかんナ、僕はネ、『先ず職業を道楽化する』という事を信条とし且つ人にも勧めている。今からでも遅くはない、君が就職するなり、家業に就くなりしたら、この言葉を守って実践して貰いたい。此の仕事は上司の命令だからやるのだとか、金もうけの為にやるのだとかではいけない。是は自分の天職である。林学であれば人工造林をやる。下刈しなければ木は枯れる、蔓切りしなければ巻き倒されてしまう。除伐、枝打ちを念入りに実行する。間伐もどれを残し、どれを伐るか、太陽光線はどう差し込むか、群落を形成させた方が旨い森林ができるのではないかなど、どうだ君、面白いだろ、木の育つのが面白い。こうして美林が育つ」

少し専門的に成って来て、まるで教授の講義を聴いているように成って来た。

「いいかね」

「ハイ、ハイ」

「そうすることによって森林の価値が高まる。金はその副産物だ」

「ハイ、ハイ」

「けれどもこの副産物の金だが、是も境遇を満足させ幸福を導く為には或る程度の貯えがなくてはならん。それにはそれ相応の努力が必要だ。儉約も必要だ。例えば君が月給を貰う。予算生活を実行することだ。食費、居住費、生計費、貯金という風に項目を立て、きちんと配分する。そしてその通りに実行する。いいかね、

食費が足りなくなつて、あと一カ月のうち三日間お菜を買う金が無いとすれば、お菜は買わない。まあ、味噌、醤油、塩、梅干位は何時でもあるからそれだけで間に合わせる。すると自然に貯金が出る。

僕は朝六時に起きて書生を連れて界限を散歩する。途中に饅頭屋がある。饅頭をふかすいい匂いがしている。すると書生はその饅頭屋の前で立止まる。然し金は呉れてないから買う訳には行かぬ。饅頭屋は諦めて僕の後を追いかけて来る。「どうだ、喰った気に成ったか？」尋ねると、「ハイ、ハイ」という返事である。「その気に成る」是も人生では大事なことである。是に依り贅沢が防げる。

僕は娘を三人持った。娘も年頃に成るといいうでしようか、お父さん、娘に着物を」と相談

を持ちかけられる。

「どんな着物だ」

「三越に娘の気に入ったものがあつたそうです」

「そうか、それではその着物をじつと見てくがエエ、あきるまで見てくるがエエ、この次の日曜日はどうだ」と云つて金はやらない。その日が来ると娘はいそいそと出掛ける。夕方帰つて来る。

「どうだ、着た気に成ったか？」

「ハイ、ハイ、じつと見詰めている裡に着た気に成りました」という答えである。人間生まれた時は全くの無一物、着物等は此の世の假の姿なのだ。エエかね」

「ハイ、ハイ」

此の爺さん全くもって始末に負えない。

(以下次号に続く)



## 本多博士と うどん・そば

数ある博士の好物の中で一番に上げられるのが、うどん・そばです。博士が昭和25年6月、埼玉県中津川県有林の視察にあたり、県庁林務課に宛てた手紙の中に「尚、毎日の食事はうどんかそば又は粥と味噌だけで結構です」と記されていることから、その好物ぶりと博士の気遣いが伺えます。

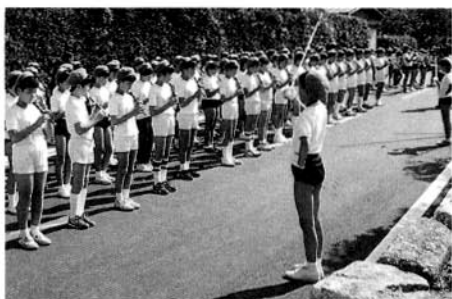
去る10月22日に催した「本多静六博士を偲ぶ会」においても、菖蒲町特産の小麦粉を使った「手打ちうどん・そば」がお客様に供され、好評を得ました。(7頁参照)

## 胸像除幕式・ 偲ぶ会を振り返って

菖蒲町助役 井上 清

博士の母校、三箇まが小学校五・六年生児童全員（一五四名）による華やかな鼓笛隊パレードが胸像除幕式の始まりを告げる。その中で博士が制作にかかわられた校歌が吹奏されると、親族の方々の食い入るような眼差が児童に向けられた。そのとき快い緊張と強い喜びが胸を襲った。

続いて、胸像の除幕が行われ、太陽に照らされた胸像が現れると、会場から「うわー」というどよめき起きた。凜々しくて、優しい像は生誕地河原井を背に、博士がこよなく慈しまれた秩父の山々を見詰めておられる。親族の方々をはじめ、多くの方が胸像を優しくなで、



▲三箇小学校児童による鼓笛隊パレード

像をバックに何枚も写真を撮っておられた。除幕式から偲ぶ会へうつる。博士は、ベストセラーとなった著書『わが処世の秘訣』の中で、人づきあいの秘訣として「客は金より手間をか



除幕式（写真上）と偲ぶ会（下）の様相



けてもてなす」といい、成功の秘訣の中で、「工夫を添えた努力が成功を早める」といわれている。

博士を偲ぶ会は、この考えで演出しよう、役場の職員が知恵を出し合い、様々な工夫を取り入れた。「菖蒲町らしさを創出し、ストーリー性のある、心づくしのおもてなしをしよう」ということが会運営の基本方針となった。

その一つが、会場の設営と運営である。会場は博士生誕の地である河原井・幸福寺前とした。それは、博士が初めて入学した学校となった幸福寺（明治六年に寺の本堂を利用して河原井学校を開設）が、当時の姿をそのままに残していること。さらに寺の境内に、博士が子供の頃よく登っては遊んだという樹齢四百年にも及ぶサイカチの木があること等から、この地が博士を偲ぶ場所として最も相応しいと考えたからである。こうして会場設営に伴うテント張

りは勿論、諸準備を含め会の運営は、全て地元河原井の皆さんと職員の手によって行われた。二つ目は、博士が「食」について様々なエピソードをお持ちなことから、料理の内容に工夫を凝らしたことである。

料理の献立は、博士が生前好物とされていたものを中心とし、材料も菖蒲町の特産品を活かすこととした。さらに、調理も地元河原井の皆さんのご協力をいただき、全て手作りとした。こうして用意された料理は、うどん、そば、きゅうりもみ、野菜の天ぷら、赤飯、きんぴら、豆腐と七品目を数え、いずれも町を自慢する郷土料理としてテーブルを飾ることができた。

用意された趣向も順調に運び、合間合間にお客様からは「おいしい、おいしい」という声が連発される。初めて企画実施された催しの中で、多くのお客様に、喜ばれ励まされたことは何よりも嬉しく感じられた。



▲地元河原井の皆さんによる手作りの料理

菖蒲町の偉大な先人、本多静六博士の胸像の除幕式と偲ぶ会が、町民の皆様とともに開けたことを限りない誇りとするものである。

## 本多博士胸像の制作を終えて

彫刻家 荻野敏雄  
竜のひげ 偉人を慕う いちよう苗



▲胸像制作に励む荻野氏

敬意をこめて、「ひげなが博士」、本多静六博士をそんなふうにお呼びしたい心境で、制作の筈を起こしました。

写真・著書などの資料から今更に、郷土の偉大な先人を知り、またこの地の文化のシンボルともなるであろう貴重な企画に参加してしまつたことは、唯ただ非力を顧みない、無知の技でありました。

葛藤しながら制作する永い時間は、私にとって、博士に教え導いていただいた、又とない尊い体験となりました。またその人徳と風貌は、最高のモチーフで、私としては生来の傑作を作ることができた時間でもありました。

せめて、この記念像に他のイメージが重ならないよう、身を慎み精進したいものと、心を新たにしております。ご指導、ご支援いただきました。ありがとうございます。

## 洋行日誌 (明治二十三年)

### 解説 (前)

博士の生家折原家で発見された洋行日誌は、青年期における博士の足跡、とりわけ博士の一生を決定付けたとされるドイツ留学の様子について非常に興味深く記している。

日誌は、明治二十三年三月二十三日に始まり、同年八月十七日までの一四八日間を記している。ドイツ留学はターラントの山林学校と、その年の十月に転校したミュンヘン大学を含め、二年間に及んでいる訳であるが、残りの部分の日誌については未だ発見されていない。

博士のドイツ留学については、その著書『体験八十五年』にも記されており、その内容、特に渡航中の模様やターラントでの生活の様子については、ほとんど日記の内容に沿ったものとなっている。これにより、博士が晩年に記した『体験八十五年』は、この日誌をもとに記したことがうかがえる。しかし、日記の内容と著書の内容を細かく見比べると、著書の方がやや誇張した表現を用いていることも分かる。

さて、日誌の形態について若干の説明を付け加えたい。日誌は前号にも記したとおり、ドイツから送られてきた書簡を、後に清書・製本したもので、博士自筆の日記とはいいがたいものである。文章は、漢字とカタカナを用い、句読点はない。文体は文語調であり、一部「です・

ます」調というアンバランスな箇所もある。この漢字カタカナ文は、清書の段階により書き改められたものと思われる。

内容は、あくまでも日々の様子を両親や妻に知らせるものであり、博士自身の個人的な悩みや詳しい学科のことなど記されていないのも一つの特徴といえる。

さて、日誌の舞台となるターラントについて改めて紹介してみたい。当時のターラント (TERRACONTA) は、人口二千人足らずの小さな町で、旧東ドイツのドレスデンの南西約十キロメートルの所に位置する。町は山麓に沿って展開し、郊外には梨や林檎の木が多く典型的なドイツの田舎町としての風景を示している。

ターラントの人口は、今でも約三千六百人と百年前と余り変わっていない。ドイツ文化会館での調査によると、「ターラント山林学校」は、現在「ドレスデン工科大学」の「林学科」の校舎として存在しているとのことである。

博士は、この町で当時唯一の日本人として、学校の隣の料理屋の二階に下宿して、林学を学んだ。それだけに気負いも大きく、他の学生に負けないよう学業に打ち込んだ。

当時の洋行は、多額の費用と多くの危険性をもっていた。しかし一流の林学者になるには、どうしても乗り越えなければならぬ壁でもあった。博士は生涯に十九回に及ぶ海外渡航を行ったが、このドイツ留学こそ、日本最初の林学博士本多静六を生んだ原点であるといえよう。

## 博士のはなし (一)

### — 生誕地での座談会から —

通信第二号の発行にあたり、記念する会では博士の郷里である河原井の方々のご参加を頂いて、去る十二月八日、河原井集会所において座談会を行いました。

座談会では、本多博士が地元河原井にどのように関わられたかをお話を伺いました。なお、出席者は次のみなさんです。

吉野登、吉野ふみ、吉野治作、本澤正行、明石新一、山田進一、折原喜兵衛、折原金吾（順不同、敬称略）

以下、座談会において話題となった逸話を中心に連載でご紹介します。

#### 消火ポンプのためにと百円を寄付

大正時代のはじめ頃、河原井の関根勇助さんという人が、博士の生家折原家に働きに行っていた。たまたま居合わせた本多博士に、「村に消火ポンプが無いので困っている」と話したところ、それならばと百円を寄付された。百円は当時では大金



▲河原井集会所での座談会の模様

であった。

村では早速消火ポンプを買い入れ、残ったお金で消防小屋を造った。購入した防火ポンプの性能は当時としては極めて良く、河原井だけでなく近隣の火事の際にも使われ、三箇長龍寺の火災のときにも大活躍をした。

消防小屋は、今の幸福寺のお地藏様の側に造られた。大きさは間口一間半、奥行き三間位で、観音開きの扉がついていた。

#### 一銭五厘を有効に使え

博士は分かっているだけでも、消防で百円、稲荷神社の建築で百円、母校三箇小学校へ百円と随分寄付をされている。

寄付をお願いするにあたり、村の代表が渋谷の博士のお宅へお願いに行ったとき、博士は「こんなことをしているから（わざわざ渋谷の方へ来るから）金がたまらないし、成功しないのだ。こんなことは一銭五厘（葉書一枚の値段）で十分だ」と話されたという。

つまり、無駄なお金を使うことは勿論、気遣いも無用であると言いたかったのだと思う。

#### 本多博士はホンダハカセ

河原井では、前から本多博士のことを「ハカセ」と呼んでいる。本多先生、本多ハカシとは呼ばない。ハカセとは「何でも知っている偉い人」という意味もあって、当時は本多博士がどの位偉い人なのか想像もつかなかったので「ハカセ」と呼んでいたようである。地元では今でも「ホンダハカセ」と呼んでいる。（つづく）

## 編集後記

第二号の発刊にあたり、創刊号に増して編集の重要性を痛感しております。

情報氾濫の世に、意外に少ない博士の情報を私たちの手により、発掘・収集しなくてはなりません。問題は収集の方途であるろう。

過日、公園関係の調査で金沢市へ、また秩父セメントと博士の関係を求めて、同社の広報室へと出向きました。何処でも、博士のお人柄に惚れるべく、懇切極まりない心の対応を賜り、一同衷心から感謝いたしております。

特に後者では、諸井恒平翁のお孫さんに当たられる諸井三佐保夫人にもお会いすることができ、親しくお話しいただき、時間の経過も忘れて取材することができました。

生家の地元でさえ風化しつつある博士の逸話を、地域のお年寄りから聞くこともできました。今後は点在する情報を求めては、線からネット化して、博士の全貌を紹介すべく、マクロの取材にミクロの編集をモットーとして、頑張っていきたいと思えます。

お寄せいただいた数々のご厚意に感謝申し上げますと共に、今後とも情報の提供を宜しくお願ひ申し上げます。

#### 【編集発行】 本多静六博士を記念する会

〒346-01 埼玉県南埼玉郡菫蒲町大字新堀三十八番地 菫蒲町役場企画課内  
電話 ○四八〇(八五) 一一一一 (代表)